



Title	家族看護実践に影響を与える要因に関する文献検討
Author(s)	隍, 智子; 菊池, 良太; 山崎, あけみ
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2019, 25(1), p. 89-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71346
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

家族看護実践に影響を与える要因に関する文献検討

Literature Review of Factors Affecting Family Nursing Practice

隍智子・菊池良太・山崎あけみ

Motoko Hori, Ryota Kikuchi, Akemi Yamazaki

要 旨

【目的】本研究の目的は家族看護実践に関する国内外の文献を検討し、家族看護実践に影響を与える要因および今後の研究課題を明らかにすることである。

【方法】文献検索は医中誌 Web と CINAHL Plus を用いて行い、研究趣旨と一致する文献各 15 件、計 30 件を検討対象とした。

【結果】研修に関する文献 13 件、実践に関する文献 6 件、教育や実践の現状に関する文献 7 件、看護職の属性と家族看護実践の関連に関する文献 4 件が抽出された。家族看護実践の関連要因として、家族看護学学習経験、臨床経験年数、職位、自身の家族観、家族介護経験等が報告されていた。

【考察／結論】知識や技術を身につけることにより、家族看護実践力が向上することは多くの研究で報告されているが、看護職個人の家庭や職場における経験によって培われた内面性と家族看護実践の関連についての研究は少ない。看護職が自らを振り返り、自分自身の家族観や価値観を把握することが積極的な家族看護実践への糸口になることが示唆された。

キーワード：家族看護、看護実践、研修、文献検討

Keywords : family nursing, nursing practice, training, literature review

I. 緒言

1992 年に日本における家族看護学の大学教育が始まって 25 年以上が経過した現在、各地域や病院での事例検討会やセミナーが行われ、臨床でも家族への支援が積極的に行われるようになってきた¹⁾²⁾。2008 年には家族支援専門看護師が誕生し、2018 年 6 月現在では 55 名の家族支援専門看護師³⁾がおり、全国で家族看護実践、教育、研究等において活躍している⁴⁾⁵⁾。

家族看護への関心が高まる一方で、2008 年から開始された医療費適正化計画により、介護療養病床を除く全病床の全国平均在院日数は 2016 年に 27.5 日まで短縮化⁶⁾されており、医療施設に勤務する看護職が患者家族と関わる機会はますます減少している。また、現代の日本社会では家族の高齢化や単身化、多様化が進んでいる⁷⁾。その為、臨床の看護職には短期間で家族への介入の必要性を見極め、効果的に家族支援を行う力が求められる。赤坂ら⁸⁾は特に 4～10 年目の看護師は患者看護のための業務に精一杯で家族を支援する余裕や自信を持っていないが、16 年目以上の看護師は傾聴的な姿勢で家族の思いを聞き出せている

と述べているように、家族看護実践者は経験を積んだ看護職が中心となっている。また、先行研究領域を見ると、家族と接する機会が多い保健師や訪問看護師を対象にした文献、または小児、精神、救急等における文献を散見することから、領域特異的に家族看護実践が発展してきていると言える。医療の現場が病院等の施設から家庭へと移行している現代において、様々な背景を持つ家族が心身共に健康な生活を送るためには、看護職が経験年数や勤務している領域を問わず家族看護の視点と知識を持ち、家族と積極的に関わる姿勢が重要となる。そこで、効果的な家族看護実践を行っている看護職の特徴やそこに至る経緯を知るために、家族看護に関する文献を看護実践の他、職場や家庭の状況、個人の感情や特性等を含めて広く検索し、領域横断的な家族看護実践への関連要因を系統立てて整理する必要があると考えた。

本研究の目的は家族看護実践に関する国内外の文献を検討し、家族看護実践に影響を与える要因および今後の研究課題を明らかにすることである。

II. 研究方法

1. 文献検索手順

文献検索の手順を図1に示す。データベースは、日本における看護学の文献が網羅的に収録されており、キーワードを活用した精度の高い検索を行える医中誌 Web と、米国を中心に看護学分野のデータベースとして利用され、データ項目が多く細やかな検索が行える CINAHL Plus を用いた。検索キーワードは“家族看護／family nursing”“研修／training・program”“教育／education”“看護実践／nursing practice”“看護態度／nurses' attitudes”“職場満足／job satisfaction”“ストレス／stress”とし、“原著論文／Academic Journals”“抄録のある文献／Abstract Available”に限定した。医中誌 Web では全年検索を実施し 73 件が抽出された。なお、医学中央雑誌データベースにおける「原著論文」には、形式や内容が「原著論文」に相当する文献が含まれているため、論文冒頭に「研究報告」「資料」等と記載されている文献も抽出された。CINAHL Plus では English に限定して前述したキーワードによる検索を実施したところ、学生を対象に研究を行った文献が多く含まれていたため、“staff”“nurse”のキーワードを加えた。また、日本と比較して諸外国では家族看護の歴史が長く研究も進んでいるため、2000 年から 2018 年 3 月までの文献に限定して検索を実施し 396 件が抽出された。それぞれのデータベースで抽出された文献のうち研究趣旨と一致する文献各 15 件、計 30 件を検討対象とした。

対象文献を看護実践に影響する要因という観点で精読し、抽出された要因を類似した内容ごとに分類した。

2. 用語の定義

家族看護実践とは、原¹⁾の家族看護学の定義である「家族を看護の対象としてとらえ、家族自らが健康問題を解決し、より高次の健康的な家族生活を実現できるように、予防的・支持的・治療的な看護介入について探求する学問領域」を踏まえて、本研究では「家族を看護の対象とし、家族自らがより健康的な家庭生活を実現するための予防的・支持的・治療的な看護介入」とする。

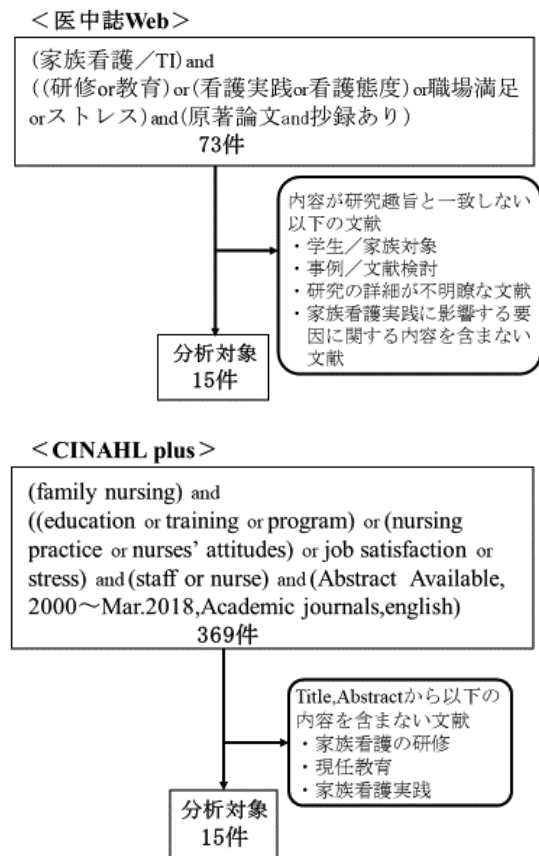


図1 文献検索方法

III. 結果

家族看護実践に影響を与える要因について国内外 30 件の文献を検討した結果、具体的な研修の内容と評価に関する文献 13 件、専門的な知識や技術を用いた家族看護実践に関する文献 6 件、家族看護実践の現状に関する文献 7 件、看護職の属性と家族看護実践の関連に関する文献 4 件が抽出された(表 1)。看護職自身の家庭や職場での経験と家族看護実践の関連に言及しているものは 30 件中 11 件あり、そのうち 3 件は看護職個人の経験から生じる感情と家族看護実践の関連に触れていた。研究対象者は病院看護師(家族支援専門看護師含む) 20 件、保健師 2 件、訪問看護師 2 件、病院看護師と訪問看護師 1 件、病院看護師と助産師 2 件、看護師と家族 3 件であり、領域としては、クリティカルケア、精神看護、小児看護、母子看護、リハビリテーション看護における文献が抽出された。

表1 検討文献一覧

No	著者（発行年）	タイトル	対象者／評価方法	家族看護への関連因子・非関連因子	分類
1	中山 美由紀, 他 (2017)	継続看護教育において家族支援専門看護師が認識している家族看護教育の内容と課題	家族支援専門看護師14名／インタビュー	・家族看護教育（学習者のニーズを満たす／指導者と学習者の人間関係形成／グループワーク、ロールプレイング、事例、DVD、プレゼンテーション）	現状
2	新村 直子 (2017)	家族看護の事例検討に基づく中堅看護師の学習 救命救急センターのフォーカスグループインタビュー	救命救急センター勤務、勤務経験5～10年の中堅看護師9名／フォーカスグループ・インタビュー	・家族との過去の体験／成長の願望（学習動機に関連あり） ・家族看護教育プログラム（家族看護アセスメント項目の習得と臨床実践の意味の違い直し／家族看護アセスメント項目の臨床における活用／自信と意欲の向上）	研修
3	中山 美由紀, 他 (2016)	継続教育における家族看護教育の現状と課題	500床以上ある141施設の継続教育担当者／アンケート自由記載の内容分析	・家族看護教育（事例、講義、演習、ロールプレイ／基礎から地域レベルの家族看護教育／対象者のニーズを満たす）	現状
4	畠山 とも子, 他 (2015)	家族看護学を学んだ看護師の家族の捉え方に表れる特徴	家族看護学を学んだ臨床経験5年以上の看護師25名／インタビュー	・家族看護学教育 ・豊かな臨床経験と人生経験 ・自分の価値観の自覚	実践
5	児玉久仁子 (2015)	家族看護実践センター式教育プログラムを受講した看護師の家族に対する認識の変化	家族看護学習未経験看護師3名／インタビュー	・教育プログラム（理論・事例検討・DVD・シナリオロールプレイ・ロールプレイ） ・自分自身との対峙	研修
6	蒔田 寛子, 他 (2012)	新任期保健師の個別支援能力向上を目的とした研修の評価 家族看護に焦点をあてて	保健師経験3年未満の保健師8名／家庭訪問アセスメントシートの記述	・研修（3回のレクチャーとグループワーク／自分の実践を事例として検討／意識的な情報収集／指導者と学習内容を共有）	研修
7	川野 英子, 他 (2011)	訪問看護師を対象にした家族看護に関する現任教育の現状	訪問看護ステーション教育担当者4名、訪問看護歴2年未満の看護師4名／インタビュー	・現任教育：「理論やエコマップの実践への活かし方を学べる」 ・現任教育：「研修内容が日々の訪問で役立っていない」「病棟での経験を応用すれば良い」	現状
8	松坂由香里, 他 (2010)	臨床看護師の家族看護実践および教育研修への認識と実施	8施設に勤務する看護師201名／アンケート	・勤務分野（緩和ケア病棟、小児・母性領域、クリティカル領域）×[家族と関わる時間][家族への支援をチームで検討・相談する機会] ・学習経験×勤務分野・勤務年数 ・学習経験と家族看護実践には関連なし	実践
9	竹元仁美, 他 (2009)	看護職者における家族看護実践に影響する要因の研究	看護師329名／アンケート	・職位 ・臨床経験年数 ・家族看護介入技能／家族情報収集技能 ・家族看護経験は家族看護認識に関連あり ・家族看護経験は家族看護実践には関連なし	属性
10	石澤恵, 他 (2009)	訪問看護師の家族観と家族看護実践の実態および家族看護実践に関連する要因	訪問看護師162名（WAM NETから無作為抽出）／アンケート	・家族看護学学習 ・家族観視点 ・年齢、訪問看護師経験年数（弱い正の相関） ・属性（同居家族構成や生まれ育った家族構成、家族看護学学習の有無）と家族観	属性
11	佐伯 あゆみ, 他 (2005)	カルガリー家族看護モデルを用いた家族インタビューのロールプレイ演習の効果 看護師の認識の変化に対する分析	勉強会参加希望看護師35名と、演習参加看護師13名／アンケート	・ロールプレイ演習（家族インタビュー技術／システムとしての家族理解／CFAM, CFIMの活用／意欲） ・ロールプレイ演習（CFIMの介入技法の実践／家族との関わり方の必要性に対する認識）	研修
12	入江 安子, 他 (2004)	保健師の家族看護介入能力に関する研究	A府下市町村の行政機関に所属する保健師348名／アンケート	・初心者（家族介入能力を意識できる／研修の機会が多く家族援助枠組みのバラディムにフィットに対応できる） ・初心者（介入時期や効果を意識して関わることが困難） ・エキスパート（家族看護介入能力を重要視しない）	現状
13	柴垣 てや (2004)	病院看護師と訪問看護師の家族看護への認識と家族への関わり方の違い	病院看護師178名、訪問看護師223名／アンケート	・訪問看護師（家族との積極的な関わり／家族と自身の感情表出） ・家族自身のニーズを確認する思考過程 ・家族看護の認識において病院看護師と訪問看護師に差はなし	現状
14	鈴木 和子, 他 (2003)	家族看護に関するコンサルテーションのプロセスとその特徴	看護師、大学院生（研究会、研究会：15～20名、事例検討会：15名）／コンサルテーションの記録	・コンサルテーション（家族の関係性をみる視点／家族の変化をみる視点／家族と看護職の関係性をみる視点）	研修
15	加藤 桂子 (2003)	「危機介入モデル」を使用した学習による看護師の家族看護の意識及び実践の変化	看護師5名／インタビュー	・学習会（危機介入モデルに関する解説）	研修
16	Ulrika Östlund; et al (2015)	Nurses' fidelity to theory-based core components when implementing Family Health Conversations - a qualitative inquiry.	家族看護教育に携わる看護師6名／家族との会話内容	・セオリーの教育とFamily System Nursingの実践（カルガリーモデルとIllness Belief ModelをもとにしたFamily Health Conversation）	実践
17	Anna Olafía Sigurdardóttir; et al (2015)	Family nursing hospital training and the outcome on job demands, control and support.	ETIプログラムに参加した母子病棟勤務の看護師と助産師479名／アンケート	・研修（カルガリーモデルのセミナー／技術研修／ワークショップ） ・管理者や同僚によるサポートの自覚 ・自主性やコントロール	研修
18	Josefin Rahmqvist Linnarsson; et al (2015)	Nurses' views of forensic care in emergency departments and their attitudes, and involvement of family members.	救急病棟28施設に勤務する看護師457名／アンケート	・女性である ・暴力被害者家族に対する救急ケア方法に関する書類の認知 ・自身の家族が病気（怪我）である	属性
19	Erla Kolbrun Svavarsdóttir; et al (2015)	The Process of Translating Family Nursing Knowledge Into Clinical Practice.	①看護師457名 ②看護師812名（救急病棟以外）／アンケート	・FNSコース受講者 ・ETIプログラム ・勤務分野【カルガリーモデル理解】外科＞母子＞内科＞救急【実践力】精神＞母子＞内科＞外科	研修
20	Nick Hopwood; et al (2013)	Understanding partnership practice in child and family nursing through the concept of practice architectures.	child and family health service organisationsに勤務する看護師22名（FPM研修受講者）／インタビュー	・継続学習 ・個々の看護師の実践 ・同僚や管理者との関係 ・組織的サポート／その他組織的要因	研修
21	Eileen M. Guest; et al (2013)	Implementing and evaluating a professional practice framework in child and family health nursing: A pilot project.	child and family health nurses21名／アンケート・フォーカスグループ	・child and family health nursing professional practice framework教育（オンラインラーニング／コンサルテーション／ワークショップ） ・継続教育	研修
22	Maria Angélica Pagliarini Waidman; et al (2012)	Nursing care for people with mental disorders, and their families, in Primary Care.	看護師17人／インタビュー	・（精神疾患を持つ患者と家族のケアに関する）知識	現状
23	E. K. Sveinbjarnardóttir; et al (2011)	Nurses attitudes towards the importance of families in psychiatric care following an educational and training intervention program.	看護師①精神科81名 ②救急39名、リハビリ24名、小児青年期12名／アンケート	・15年以上の臨床経験（総FINC-NAにおいて） ・女性／教育歴／自身の家族の病気（FINC-NA下位項目において） ・カルガリーモデルを用いた家族看護研修（セミナー／スーパービジョン／セッション／事例検討）	研修
24	Deborah L. McLeod; et al (2010)	Knowing the family: interpretations of family nursing in oncology and palliative care.	看護師30名と19家族／インタビュー	・家族と看護師の相互理解 ・家族の懸念や苦悩への対応	実践
25	Cheryl Fisher; et al (2008)	Nursing staff attitudes and behaviours regarding family presence in the hospital setting.	看護スタッフ89名／アンケート	・日常のケアにおいて家族の存在を重要視していること	実践
26	Erla Kolbrun Svavardóttir (2008)	Excellence in nursing: a model for implementing Family Systems Nursing in nursing practice at an institutional level in Iceland	Landspítali University Hospitalに勤務している看護師／評価なし	・カルガリーモデルを用いた家族看護研修（4年間に渡ってリーダー教育から全スタッフへの教育を実施する）	研修
27	Teija Korhonen; et al (2008)	Implementing child-focused family nursing into routine adult psychiatric practice: hindering factors evaluated by nurses.	精神科看護師223名とMental Health Nurses88名／アンケート	・家族支援に関する教育 ・Family-centred approach、CF-FN、関連法規などの知識 ・親であること（親をサポートするスキルがある） ・親であること、または常勤者（患者の健康状態に左右されない）	属性
28	Raquel Gusmão Oliveira; et al (2007)	The opinion of nurses regarding the work they perform with families in the Family Health Program.	ファミリーヘルスプログラムに登録している看護師20名／インタビュー	・技術 ・知識 ・人間関係を構築する能力	実践
29	Omolola Irinoye; et al (2006)	Family nursing education and family nursing practice in Nigeria.	専門看護師25名／インタビュー	・家族看護専門教育の充実	現状
30	Johanne Goudreau; et al (2006)	The impact of a family systems nursing educational program on the practice of psychiatric nurses: a pilot study.	精神科と救急に勤務する看護師6名／インタビュー	・カルガリーモデルを用いた家族看護教育プログラム	研修

1. 家族看護実践の構成要素と関連要因 (図 2)

文献検索の結果、家族看護実践に影響する要因は「施設の要因」「個人的要因」「専門家としての要因」の3つに分類することができた。また、対象文献において家族看護実践を測定または評価する際に用いていたキーワードから、家族看護実践は看護職としての経験や家族看護の知識・技術を用いて看護を実践する能力を表す「家族看護実践力」、患者家族を適切にアセスメントすることによって得られる家族看護の必要性の理解を表す「家族看護認識」、看護職の知識や思考、感情から生まれる患者家族に対する言動や表情等を表す「家族看護態度」の3つの要素で成り立っていると捉えることができた。

2. 家族看護実践の関連要因の分類 (表 1)

文献検討により抽出された家族看護実践の関連要因は「施設の要因」「個人的要因」「専門家としての要因」の3つに分類することができた。

1) 施設の要因

組織が家族支援を重要視しておらず家族に関わる時間を確保できない、上司や同僚からのサポートや学び・実践の共有がより良い家族支援につながる、といった報告があり、職場の方針や労働

環境が家族看護実践に影響を与えていた。

2) 個人的要因

看護職の家族観・価値観、看護職自身の家族の病気経験、年齢、性別、親であること、人間関係を構築する力、自主性／自己コントロール、家族の言動への感受性といった、看護職自身がそれまでの人生で培ってきた感性や思考、個人特性等が挙げられた一方で、家族看護実践に関連する家族観と看護職の属性（家族構成や家族看護学習）には関連がないという報告があった。

3) 専門家としての要因

研修／教育、知識、中堅看護師としての成長の願望、家族介護介入技能／家族情報収集技能、臨床経験年数、臨床経験、職位、領域、家族との心理的距離の短縮、家族との相互理解、適切な感情表出、専門職としての意識、家族看護の重要視等が報告されていた。多くの文献において、家族を看護する専門家として知識や技術を身につけ、臨床経験を積むことが家族看護実践に影響を与えると報告されていた。

家族看護学習方法には講義・事例検討・ロールプレイ・コンサルテーションといった形式が取り入れられており、カルガリーモデルを積極的に用いた研修や実践に関する論文が最も多かった。

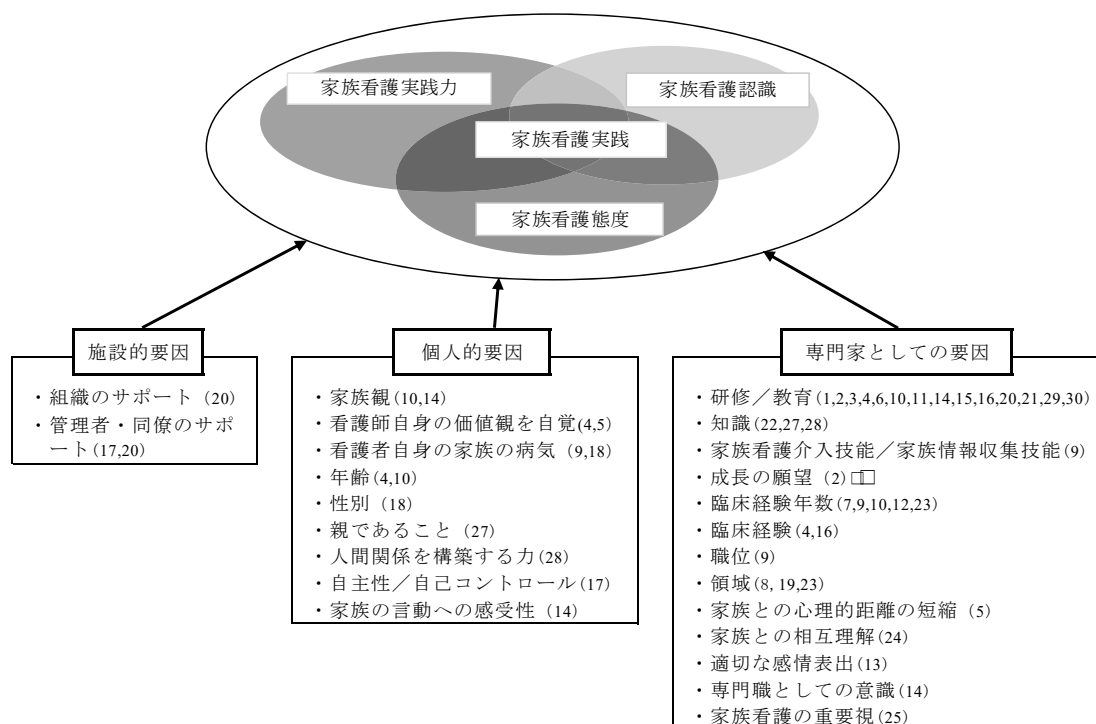


図2 家族看護実践に影響を与える要因 (図中の番号は表1の文献番号に準ずる)

また、家族看護を難しくさせている原因には、家族まで意識が向かない・家族は患者の背景と認識している、家族に関わることへの不安、家族と関わる時間が持てない、家族は背景や構造等が複雑である、専門家として正しい言動をとらなければいけないという思い等が挙げられていた。しかし、これらの困難感、看護職がアセスメントやインタビューの技法、家族との関わり方等を習得することにより軽減していくとされていた。

家族看護実践の関連要因として教育や経験年数、家族看護経験等が挙げられる一方で、学習経験・研修や家族看護経験は家族看護実践に関連が無い、家族看護認識における病院看護師と訪問看護師の差異には関連が無いとする報告があった。関連が見られなかった要因として、「(研修内容が)日々の訪問であり役立っていない」「(病棟勤務の)経験を応用すればよい」というインタビュー内容や、経験の少ない保健師は家族介入能力を用いる時期や介入効果を予測した行動が困難である一方で、経験を積んだ保健師は家族介入能力そのものをあまり重要視しなくなる、という調査結果が挙げられていた。

IV. 考察

今回の文献検討の結果、家族看護実践は「家族看護実践力」「家族看護認識」「家族看護態度」から構成され、この家族看護実践には「施設的要因」「個人的要因」「専門家としての要因」の3つの要因が関連していることが分かった。また、それぞれの要因は3つの構成要素のいずれかに影響を与えており、どの要因も家族看護を実践していく上で重要な役割を果たしていることが分かった。

1. 家族看護実践に影響を与える要因

1) 施設的要因

本研究において検討した文献では、規模・領域の異なる病院または行政、訪問看護ステーション等、様々な施設に所属している看護職を研究対象としていた。どのような組織に属していても、勤務体制や勤務条件、人間関係等において働きやすい職場環境は看護実践力を高めるために重要であると言えるであろう。眞鍋ら⁹⁾は良い人間関係は個人の持つ能力を十分に発揮するプラスの相乗効果が得られることと、職務および給料の満足

感が、能力を存分に発揮できているという充実感と正当な評価を受けているという認識を生み、さらなる能力向上意欲が得られることを示唆している。また、育児や介護、自己啓発、社会貢献活動等とキャリア発達を両立するためには、看護管理者等が組織のニーズと個々の看護者のニーズが合致するような職務調整をすることが必要である¹⁰⁾¹¹⁾とされており、家族看護実践においても同様の結果が得られることが確認できた。家族看護が個人の家族観に影響されやすい¹⁾という性質や、院内研修における家族看護教育をクリニカルラダー2または3を対象にしている施設が多い¹²⁾こと等を踏まえると、自身の考えや判断を他者に相談できるような人間関係や、継続してキャリアを積むことができる組織としての取り組みが重要になってくると言える。

2) 個人的要因

原¹⁾は、家族看護が個人の家族観に影響されやすいとする一方で、効果的な家族看護介入には家族を客観的にとらえることが重要であるとしている。患者家族を思う気持ちや寄り添う感情は個々の看護職の家族背景や人生を基盤にして形成されているものであり、感情のコントロールが求められる「感情労働」と言われる看護職の仕事¹³⁾において、理論や技術を学ぶだけでは個人の価値観や家族観を完全に切り離して患者家族と向き合うことは難しい。それぞれの看護職が培ってきた価値観や家族観を認識すること¹⁴⁾¹⁵⁾により、患者家族全体または個々の家族員が抱いている思いをそのまま受け止め、専門職としての客観的な判断と看護介入を実践できるのであろう。

年齢や介護経験、親であること等が関連要因として挙がる背景には、畠山ら¹⁴⁾や石澤ら¹⁶⁾が人生経験と臨床経験を積むことで患者家族の理解が深まることを示唆しているように、年齢を重ねるに従って、職場だけでなく自身の家族や地域において新たな役割を担い、様々な経験をすることが影響していると考えられる。婚姻の有無が関連要因として挙げられていないことから、結婚や育児といった枠にとらわれず、介護や地域社会活動、自己啓発等における人間関係構築力やコミュニケーション力が看護職として家族と関わる際にも活かされていると言える。

3) 専門家としての要因

文献検討の結果から、研修等の教育により家族看護の知識や技術を身につけることが、家族看護

実践の向上につながるという報告が最も多かった一方で、研修が継続的に行われない、臨床で抱えている問題に対応していない等といった理由で研修内容が実践に活かされないという報告があった。現在活躍している看護職の中で家族看護学を体系的に学んでいる者は一部に過ぎないが¹²⁾、若い世代の看護職はエキスパートに比べて家族看護学を学ぶ機会が多く、家族介入に必要な能力を意識しながら実践に臨むことができる¹⁷⁾。また、家族看護学習経験のない看護職の中には、特別な援助として意識せずに臨床経験に基づいて家族看護実践を行うことができる者もいる¹⁸⁾。これらの報告から、家族看護に関する専門的な知識や技術を持つ看護職と、臨床における様々な問題や困難、または成功体験を持つ全ての看護職が共に学びを深めることで、より効果的な家族看護実践が領域や世代を超えて行われると考える。

2. 今後の研究課題

家族看護実践に影響を与える要因という視点から 30 件の対象文献を「施設的要因」「個人的要因」「専門家としての要因」の 3 つに分類することができた。3 つの要因のうち「専門家としての要因」に関する文献は 30 件中 26 件と大多数を占め、家族看護実践との関連がより明確になっているが、「施設的要因」に関する文献は海外での研究による 2 件のみであり、職場の環境や体制が家族看護実践に与える影響を十分に検討できているとは言えない。また、「個人的要因」として挙げられた家族観や家族構成等については文献によって異なる結果が報告されている。以上のことから、今後は職場や家庭において様々な役割と責任を担っている看護職の経験と、そこから生じる価値観や感情に注目して、家族看護実践に影響を与える要因に関する研究を進めていく必要がある。

V. 結論

1. 家族看護実践に影響を与える要因に関する国内外の論文は、研修に関する文献 13 件、実践に関する文献 6 件、現状に関する文献 7 件、看護職者の属性に関する文献 4 件、合計 30 件が抽出された。
2. 家族看護実践は「家族看護実践力」「家族看護

認識」「家族看護態度」の 3 要素から成り立っており、それぞれの要素に「施設的要因」「個人的要因」「専門家としての要因」が関連していた。

3. 看護職は看護実践力の習得に加えて自身の家族観や価値観を把握することにより、より効果的な家族看護実践を行える可能性が示唆された。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP16H05565 の助成を受けて実施したものの一部である。

利益相反

本研究に開示すべき COI はない。

文献

- 1) 山崎あけみ, 原礼子 (2015): 家族看護学 19 の臨床場面と 8 つの実践例から考える (改訂第 2 版), 4-5, 南江堂, 東京
- 2) 藤岡寛(2014): 家族看護学:その歴史的経緯と展望, 看護と情報, 21, 3-7. doi: 10.24459/jjnla.21.0_3
- 3) 日本看護協会 (2018): 資格認定制度 専門看護師・認定看護師・認定看護管理者. <http://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/cns> (2018.6.12 閲覧)
- 4) 畠山卓也, 池添志乃, 田井雅子, 升田茂章, 榎本香, 岩井弓香理, 畦地博子, 中山洋子, 中野綾美, 野嶋佐由美 (2017): 専門看護師による家族対処機能強化に向けた家族看護実践, 高知女子大学看護学会誌, 42(2), 41-50
- 5) 池添志乃, 野嶋佐由美, 中野綾美, 中山洋子, 田井雅子, 畠山卓也, 榎本香, 升田茂章, 岩井弓香理 (2015): 家族支援専門看護師による家族への看護介入『家族看護エンパワメントガイドライン』を活用して, 高知女子大学看護学会誌, 40(2), 63-72
- 6) 厚生労働省 (2018): 平成 28 年 (2016) 医療施設 (動態) 調査・病院報告の概況. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/16/> (2018.8.29 閲覧)

- 7) 前掲書 1), 98-100
- 8) 赤坂優子, 境好枝, 麻生千春 (2013): 集中治療看護師の経験年別にみた家族看護への思いと 対応, 第 43 回日本看護学会論文集成人看護 I, 95-98
- 9) 眞鍋えみ子, 小松光代, 和泉美枝, 倉ヶ市絵美佳, 橋元春美, 北島謙吾, 岡山寧子 (2012): 大学附属病院の看護職における Sense of Coherence と労働環境満足度・看護臨床能力との関連, 日本看護研究学会雑誌, 35(2), 19-25. doi:10.15065/jjsnr.20120229003
- 10) 住田陽子, 坂口桃子, 森岡郁晴, 鈴木幸子 (2010): 看護師のキャリア・アンカー形成における傾向, 日本看護研究学会雑誌, 33(2), 77-83. doi: 10.15065/jjsnr.2009120300611
- 11) 近末清美 (2015): 子育てをしながら病院に勤務する看護職のワーク・ライフ・バランスと職業キャリア成熟との関連性, 日本看護管理学会誌, 19(2), 67-75. doi:10.19012/janap.19.2_67
- 12) 中山美由紀, 岡本双美子 (2016): 継続教育における家族看護教育の現状と課題, 大阪府立大学看護学雑誌, 22(1), 45-53
- 13) Pam Smith(1992)/武井 麻子, 前田 泰樹 (2000): 感情労働としての看護, 224-225, ゆみる出版, 東京
- 14) 畠山とも子, 児玉久仁子, 手島美子, 渡辺俊之 (2015): 家族看護学を学んだ看護師の家族の捉え方に表れる特徴, 家族療法研究, 32(3), 52-61
- 15) 磯野明子 (2000): 看護者のもつ家族観を探るー看護者の経験が家族観にどう影響しているかに焦点をあててー, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録 25, 513-519
- 16) 石澤恵, 富岡小百合, 大竹まり子, 赤間明子, 鈴木育子, 小林淳子, 佐藤千史, 叶谷由佳 (2009): 訪問看護師の家族観と家族看護実践の実態および家族看護実践に関連する要因, 山形医学, 27(1), 79-88
- 17) 入江安子, 津村智恵子 (2004): 保健師の家族看護介入能力に関する研究, 家族看護, 2(2), 138-147
- 18) 今井美佳, 柳原清子 (2015): エスノグラフィーを用いた一般病床での家族看護実践における“関わりの見極め”, 家族看護学研究, 20(2), 56-67